

●幽玄な舞ファン魅了

毎年十月の第二土曜日、延岡に全国の能ファンの目が集まる。「のべおか天下一薪能」。舞台は延岡城址(し)二の丸広場。「千人殺し」と呼ばれる石垣がかがり火に幻想的に浮かび上がり、鼓や能管の音をバックに、現代の能楽界第一人者の舞が観客を幽玄の世界に誘う。

旭化成発祥の地であり、かつて工都として一時代を築いた延岡市だが、今当時の面影はない。薪能はその沈滞感を振り払い、延岡の新しい顔に、と登場してきた。

事の始まりは延岡市制六十周年の一九九三(平成五)年。このとき、同市の内藤記念館に展示されていた六十六点の「内藤家伝来の能面」が旧延岡藩主で、内藤家十七代当主の故内藤政道氏から市に寄贈された。このうち三十点に豊臣秀吉や朝廷から能面打ちに与えられた「天下」の称号の焼き印があった。

この貴重な文化財を活用、全国に延岡を売り出す手だてを模索する中から生まれたのが内藤家能面を使った天下一薪能である。町づくりに情熱を燃やす市民が中心になって九六(同八)年、薪能実行委員会を結成(現在・NPO法人のべおか天下一市民交流機構)、能楽講座、能装束の着付け講座などを通して盛り上げ、九七(同九)年の第一回開演にこぎ着けた。

市民の熱意に、現代能楽界トップの人間国宝・片山九郎右衛門氏らが応えた。片山氏は第一回、また五回目からは狂言の人間国宝・茂山千作氏も出演、二人の円熟した舞台は、かがり火に照らし出された「千人殺し」の石垣と絶妙に溶け合い、全国からの観客を酔わせている。

六回目の昨年は十月十二日に公演。初めて地元公募した小学生十六人が子方(子役)として出演、人間国宝と共演した。市民がボランティア

アとして取り組む舞台設営も含めて、地元参加型の薪能は全国でも珍しく、例年以上に盛り上がった。

公演日を中心に「能ウィーク」も設け、この期間は市民能舞台、能面展など、延岡が能一色に染まる。薪能を通して延岡からの文化発信を目指して六年。設立の最初から薪能開催に携わる松下宏さん(のべおか天下一市民交流機構理事長)は「六年で基礎固めはできた。これから大切なのは継続するための後継者づくり」と言葉に力を込める。

薪能は今、延岡の新しい顔として定着、町づくりに確かな足跡を残している。

南村正明



薪能。人間国宝の円熟した舞が観客を幽玄の世界に誘う